

本邦研修の成果を現地でモニタリング ～より良い橋梁維持管理を目指して～

2015年に長崎大学と共同で国際協力機構（JICA）からの委託で橋梁維持管理研修を開始して3年目。開発途上国での技術協力プロジェクトの一部として本邦研修を実施することはあっても、本邦研修を中心にして、複数国で現地業務を行う事例は珍しい。

これまで日本が橋梁建設を支援した国を対象に、10数カ国から20人強の参加を得て、長崎大学を舞台に毎年3月に研修を実施してきた。その期間は3週間。限られた時間の中で、講義・実習・視察などを組み合わせた。例えば、鋼橋の劣化症状とその発見といった技術的な講義・実習から、国内の地方自治体の維持管理体制や計画、コミュニティが参加する道路・橋梁維持管理システムなど、研修員が帰国後に実践できそうな内容を考慮してカリキュラムを構成した。視察・実習先は、長大橋の維持補修の現場からプレキャストコンクリート工場まで、橋梁維持管理にとって重要となる現場は多岐にわたる。

研修の主な特徴を2つ紹介したい。まず、研修員が橋梁維持管理を行うためのアクションプランを作成すること。これは、帰国してから研修で得た知識を普及することはもちろん、少しでも現状を変えるために必要なことを研修員自身とその所属機関が実践するために取り組んでもらっている。各々の状況が違うこともあるが、その内容も多岐にわたっている。何度も「現実的なものにしてほしい」と伝えていても、現地の状況に対して壮大な夢とも言えるようなプラン、例えば先進的な橋梁管理システムを開発するといったものもある。一方で、定期点検の検査フォームの見直しや、同僚も含めた関係者に対して本研修で学んだ内容を伝えるための研修を行うといった、現実的な提案も見られる。

2つ目の特徴はモニタリング。毎年次、参加国の2～3カ国を選んで、研修の数カ月後に現地を訪問する。アクションプランの実施状況を確認・促進するとともに、橋梁維持管理の促進を支援することが目的だ。モニタリングの期間は1週間程度。訪問する旨を伝えると、研修員はこちらが想定している以上にスケジュー

ルを細かく詰めてくれる。先に示したアクションプランの確認だけでは済まずに、ワークショップやセミナーなどを実施することとなる。「研修員が帰国後に行ったプレゼンテーションが契機になって、維持管理予算を確保することができた」、「アクションプランを実施中、他の重要な課題を発見して、そちらに今取り組んでいる」など、研修員自身で考え、行動した結果を聞くのは楽しい。本邦研修では環境が異なる多数の国を対象としていることから、カリキュラムは最大公約数的なものにならざるを得ない。



長崎市内の橋梁で実施した橋梁点検実習の様子

アクションプラン作成時にも議論をしているものの、私たちが現地を訪問して、橋梁やそれを取り巻くその国の自然・社会環境を目にして理解することで、その国にとって優先的に取り組むべき課題に関して研修員と深い議論をすることができると、多数の生徒を相手にした学校での授業と、個別の課題に合わせた家庭教師のような組み合わせを、効果的に実施できていると感じている。

本業務を通して、研修員の理解の醸成には、研修で知識を得ること（情報として知っている状態）に加えて、それを実践すること（「経験者から直接聞いた」、「見た」、「触れた」、「やってみた」という機会や経験）が必要であることを再確認した。また、分野さえ共通していれば、日本を訪れて研修を受けた経験を持つ人、いわゆる帰国研修員が同一機関に複数いるほうが格段に物事を進めやすいということも実感した。

3週間の本邦研修を通じて彼らが認識した日本の技術の優位性や、彼らと私たちとの間に培われた信頼関係から生まれる「いろんなことを吸収したい」、「もっともっと学びたい」という研修員の勢いと情熱に私たちが励まされ、胸いっぱい訪問先から帰国の途に就く。もちろんアクションプランの進捗が遅い国への対応や研修員の理解度を平準化することなど課題は存在するが、他の分野でも参考にしてもらえるような事例とすべく、2018年3月の研修の準備を進めているところである。

（文責：国際開発センター 主任研究員 桑原 準）